

輝ける別府八湯を夢見て…

野上 泰生

新年早々に若干ではありますが誇大妄想気味な文章をお許してください。これから述べる内容は今までの活動の中で様々な方々から教えて頂いたものを自分なりにまとめてみたものです。以下の3つのテーマ、つまり、大きな部分での別府八湯のイメージ戦略から地域別のかかなり細かい部分まで、言及しています。中には間違いもあるかも知れませんが、お許してください。

- 1: 別府八湯を表す最上位のイメージとしての「世界遺産化戦略」
- 2: 人材と温泉資源の有効活用による「理想の温泉地」への挑戦
- 3: 八湯の個性に応じた「文化の町づくり」で観光地としてのバランスを。

私なりに、これら3つのテーマを実現する事こそが「輝ける別府八湯」の実現になると思い、かなりの長文ですが、2002年お正月を記念して今日新聞様に寄稿させていただきます。

テーマ1: 別府八湯を表す最上位のイメージとしての「世界遺産化戦略」

別府市は、世界一の温泉都市です。豊かな温泉資源(湧出量=世界2位、泉質の多様さ=世界1位)、古くから住民の生活に取り入れられた「温泉の文化」により証明されます。東西南北12キロ四方の大規模な空間のいたるところに温泉が湧き、住民をはじめ訪問者の大部分が気軽に温泉を楽しんでいる、このような都市は世界中どこを探してもありません。温泉というのは太古の昔から地熱活動によってもたらされた大いなる地球の恵みです。そういう意味では別府八湯はたいへん恵まれた都市とも言えます。(観光協会は「世界の宝物」宣言をしました)

「別府は温泉が豊かな所だ」そのイメージは大部分の日本人は抱いている事でしょう。しかしながら、残念な事にそこから先が十分に理解されていません。「世界一の温泉都市だ」「多種多様な温泉が楽しめる」「いたるところに共同湯があり、非常に安価で楽しめる」「住民が自宅に泉源を持っている」「歴史的な温泉が沢山ある」等です。実はこれらのイメージが一番肝心でして、ここが抜けていると他の温泉地となんら区別がつかない訳です。まったくもったいない、「世界の宝物」も持ち腐れ状態であります。

別府八湯が「輝ける町」になる為に、まず取り組むべきは、世界に通用するシンプルかつ魅力あるイメージの構築です。答えは簡単です「世界遺産の温泉都市」になれば良いのです。そうすれば自然に別府八湯の本当の姿が伝わっていく筈です。

実を言いますと、「世界遺産」になれるかどうかはあまり問題でないと思っています。別府八湯が「戦略」として「世界遺産化」を進めるだけでも相当の効果は得られると思いますので、あまり細かい議論は避けましょう。

それでは具体的に御説明します。

まずは、「豊かな温泉資源」のアピールです、豊富な湯量と多様な泉質のアピールと言い替えても構いません。豊富な湯量の象徴としてもっとも適しているのは「ゆけむり」です。幸いな事に21世紀に残すべき日本の風景の第2位にまで選ばれています。この「ゆけむり」を有効に活用します。例えば夜は幻想的な雰囲気を感じられる様にライトアップ等を行い、より積極的に都市の景観に取り入れると面白いでしょう。「地発電施設」などもこの豊富な温泉エネルギーを象徴します。次に多様な泉質のアピールですが、「別府八湯には世界中に存在する11種類の内、10種類がある」という説明も大切ですが、よりビジュアルに訴える事が効果的だと思います。それは「色」です。海地獄等の「青」、血の池地獄の「赤」、明礬温泉の「白」などなど別府には多様な泉質と共に多様な泉色を呈している温泉が存在します。これを「別府八湯虹色温泉郷」というキャッチフレーズの下に打ち出します。また、「砂湯」「泥湯」「滝湯」「蒸し湯」等のユニークな温泉入浴法も同時にアピールすると多様さが浮き彫りにされるでしょう。

豊かな温泉資源の次は「独特な温泉文化」のアピールです。実は別府八湯の最大の個性はここにあります。全世界どこを探しても別府八湯ほど住民の生活の中に温泉が取り込まれている地域はありません。「独特な温泉文化」のアピールには3つのポイントを押さえるべきです。

1つ目は、古くから住民の生活の中に温泉が取り入れられてきた証拠である所の「歴史的」な温泉の建造物をアピールする。例えば「竹瓦温泉」や「浜田温泉」、「駅前高等温泉」等は今も残る貴重な近代化遺産であると言えますので、これは「保存」すべきです。その他にも沢山あります。一遍上人が作ったと言われている「鉄輪の蒸し湯」、聖徳太子の時代から日本で4番目に数えられたと言われる「四の湯」、森藩のお殿さまが整備したと言われる「照湯」を検証し、復元も見据えながら整備します。また、「不老泉」「楠温泉」等も建て替え時には当時の姿に忠実に復元しては如何でしょうか？そしてそれらを総べて温泉文化遺産として市の指定文化財として積極的に認めるべきです。もっと欲張るのであれば、現存する古い温泉旅館、別荘等も温泉文化遺産と言えると思います。これらの一連の「歴史的温泉建造物の群」の整備が進行するにつれ別府八湯は世界に比類する場の無い、温泉文化遺産の宝庫となる筈です。これだけでも多くの訪問者の心を引き付ける事でしょう。

2つ目ですが、別府八湯の住民の「生活の中の温泉文化」をアピールすべきです。別府八湯のほとんどの地区には共同湯があり、その共同湯において地域住民が交流し、生活文化の基礎となっています。この「共同湯」は現在どんどん姿を消しています。これは是非とも守って頂きたい。この「共同湯」は地域社会との接点として子供達の教育の場としても非常に有効に働くものと思います。ですので、地域の方々ももっと積極的に「共同湯」を使い、守る。どうすれば使いやすくなるのか、守れるのか、真剣な議論がなされるべきだと思います。お湯の温度を少し下げられてはいかがですか？きっと子供達が戻ってくるはずですよ。この「共同湯」こそが、別府の温泉文化の根源であり、大切な宝であると認識すべきだし、もっともっとアピールすべきです。

3つ目ですが、温泉を活用している文化のアピールです。地熱発電に始まり、暖房、地獄蒸し調理法、飲湯、リハビリ、花卉栽培等々が挙げられます。これらの活用の文化はやはりユニークな物であり、別府八湯の住民が長らく温泉に慣れ親しんだ事の証拠とも言えるでしょう。特に地獄蒸しなどは近年注目を浴びており、人気も集めやすいテーマだと言えます。また、活用法に関しては今後も様々なテーマがございます。昨年秋に実施された「別府八湯温泉泊覧会＝ハットウオンパク」でも紹介されましたが、温泉泥(＝ファンゴ)の美容／医療分野への活用、後述します、温泉地での健康増進プログラムの開発、医療分野への活用。等。様々な活用法が現在模索されております。これらも人材と温泉資源の豊富な別府八湯ならではの活用法として洗練される物と思います。

上記の「豊かな温泉資源」と「独特な温泉文化」の両要素を満たした時に、別府八湯は名実共に世界でも希少な「温泉文化都市」として広く認知され、守り伝えられるべき「世界遺産」の都市へと昇華するのであります。

テーマ2: 人材と温泉資源の有効活用による「理想の温泉地」への挑戦

前段でも少し述べましたが、別府八湯には多様な人材と豊富な温泉資源がございます。そして古くから温泉が生活の中に取り入れられて活用されてきたのも事実です。しかしながら、温泉の力というものはまさしく素晴らしいもので、単に「入浴」のみならず「健康増進」や「美容」という部分でも大きな効果を発揮します。

昨年春に行われました、別府八湯温泉文化祭の「温泉文化研究所」におきまして市民有志により5日間連続で意見の交換会が行われました。それぞれのテーマは「別府八湯の歴史と町づくり」「ヨーロッパの温泉地の事例」「温泉による健康増進」「温泉による美容」そして「長期滞在型温泉地について」という事でした。これら一連の意見交換の中から「理想の温泉地」像というものが見えてきました。

別府八湯における「理想の温泉地」像とはどんなものなのでしょうか？それは、歴史的な成り立ちを踏まえ、八湯それぞれが独自の個性を発揮し、輝いている事(後述します)。そして、何よりもまず住民が温泉の恵みを有効に享受でき、心身共に「健康」で「綺麗」である事。その住民と訪問者の「温かい交流」の場があり、結果として「長期滞在」してみたい温泉地となる事です。

21世紀に入り、日本は間違い無く「高齢化社会」を迎えます。そして「新しい都市と地方との相互補完関係」も築かなくてはなりません。そのような社会の中で「別府八湯」が有効に存在し、機能する為にはこれらの要素を満たしている、すなわち「理想の温泉地」にならなくてはならないという事です。

具体的な試みが既に開始されています。昨年秋にスタートした「別府八湯温泉泊覧会＝ハットウオンパク」です。ハットウオンパクは、「世界一の温泉地で元気＋綺麗になる！」をキャッチフレーズに、多種多様な人材により全て現存する施設を舞台に「温泉」「健康美容」「ウオーキング」「食」というテーマで10日間に渡り行われました。別府市民そして大分県民を主な対象として行われたこのイベントでは約200の体験交流型のプログラムが開催され、10,000人程の方々が参加されました。その方々は少しだけでも将来の別府八湯の姿を体験した訳です。

多様な温泉を体感する試み、温泉やホテル旅館で体を動かし健康になる講座、別荘やホテルでは生活を豊かにし心も美しくなる講座、八湯の歴史を知り住民と触れ合えるウォーキング、温泉泥(＝ファンゴ)を使用したエステ、噴気を利用したり温泉前で賑やかな音楽を聞きながら交流できる食のテーマレストランなど。これらの講座を自分に合った楽しみ方で自由に選択できる運営。どれも私達が目指す「理想の温泉地」には必要な要素であります。

このハットウオンパクは、今後も継続的に開催され、将来的には一年中、このような講座が別府八湯の各地で開催され、住民も訪問者も気軽しめる環境になるようにしようとしています。

そのような環境が実現できたあかつきには、例えば住民が病院の先生から自分にあった温泉健康法を指導してもらい、実践することで健康になれます。お年寄りの寝たきり問題も解決されるし、お年寄りにもやさしい町になります。行政の負担する医療コストも下がるでしょう。例えば、別府八湯に滞在して、温泉

で健康になったり人生を豊かなものにするきっかけをつかもうとする人々が都会から訪れる様になるでしょう。その方々は多くの住民との交流がうまれる事によって、毎年訪れてくれるようになるでしょう。結果として、別府八湯に移住してしまう人も増えるでしょう。

まさに、「理想の温泉地」とは「高齢化社会」や「新しい都市と地方との相互補完関係」を満たす、つまり別府八湯が21世紀の日本の社会に必要なものと証明できる答えとなる筈です。

「理想の温泉地」となるにはもう一つの条件が求められます。それは「豊かな自然環境」です。別府は海と山に囲まれた都市です、海岸線の整備による親水空間の演出、湯布院を始めとする奥別府の豊かな自然環境、そして歴史と情緒ある美しい町並みの整備が同時に進められるべきだと考えます。別府市には素晴らしい「都市景観条例」がございます。そしてマナーアップの為に素晴らしい条例も策定されました。後はこれを如何に有効に活用すべきかという問題だけです。

これらの素晴らしい制度を有効に活用する主役はまさしく「住民」でなければならぬと思います。現市長の慧眼により、別府八湯には非常多様な民間の人材が育っています、今こそ行政と住民が一体となり別府八湯を「理想の温泉地」にすべく邁進すべき時期では無いかと思えます。日本の各地では住民主体型の行政のありかたを模索する意味から「住民基本条例」の制定に向けた動きが活発化しています。別府八湯では、住民の動きが活発化していますので、行政がこの様な取組みを始めるには、まさに格好の時期だと思えます。よろしくお願ひします。

テーマ3: 八湯の個性に応じた「文化の町づくり」で観光地としてのバランスを

別府八湯の主要産業は「観光」である事は疑いようの無い事実です。別府観光の祖「油屋熊八翁」が築き上げた観光地としての基盤はその後別府八湯に多大なる利益をもたらしてくれました。

あえて述べさせていただきます。別府八湯は「脱観光」による「観光振興」を図るべきです。矛盾する様ですが、御説明させていただきます。市役所の統計によりますと現在でも年間1,000万人を超える観光客が別府八湯を訪れています。しかしながら町は疲弊し、実体験として町で商売されている方々にはそんな数は想像できない筈です。これは「観光地としての別府八湯」のバランスが崩れているという事の証明です。

具体的に例を述べさせていただきます、現在、別府八湯を訪れる観光客の大部分は、旅行エージェントによって作成された観光ルートをもそのままぞり、旅館ホテルにより囲い込みされ、町にはなかなか出かけてくれないのです。結果として町は疲弊し、魅力の無いものになってしまい、しまいには観光客からも敬遠されてしまうという悪循環に陥ってしまいました。

別府八湯の観光を再度蘇らせる為には、同じ手法をくり返しては難しいと思わざるを得ません。それが言い方が悪いかも知れませんが「脱観光へのこだわり」なのです。

現在、私達が行っている「路地裏散歩」も従来の観光とは一線を画しています。観光業者でない「地元の住民」が自ら町を愛する気持ちを愉しみながら伝え、観光目的で作られていない「本物の地域」の歴史文化を紹介する。参加者はあくまで自主的に参加してくれる方々により構成される。そんな「新しい交流」のスタイルが評価され、マスメディアや地域の支持が得られている訳です。結果として徐々ではありますが町が面白くなり、観光客も着実に増え、町に活気がもどりつつあります。

私達が「竹瓦界限」で行っているのは、「文化の町づくり」です。路地裏の温泉文化、生活文化、食文化を丁寧に紹介しているだけです。それは本物があります、訪れる人々はこの地域の「本物の文化」に触れて結果、喜んでいただける訳です。

「観光振興」という大切な事を行うのであれば、従来の観光宣伝一本槍の手法を改め、もっと「文化の町づくり」に力をそそぐべきだと考えます。それにより肥大化した別府八湯の「観光」とのバランスが取れ、新しい顧客層を引き付け、町に活気が戻り、結果として本来の目的である「観光振興」が達成されます。一般的にこの手法は「結果観光」と呼ばれます。現在、入り込み客を延ばしている観光地の大部分はこの「結果観光」の手法により成功しています。

別府八湯にはそれぞれの地域にユニークな「本物の文化」が残っています。これらの各地域がどのように磨きあげられるべきなのか？これから一つ一つ詳しく例示します。これらは、別府八湯にちらばる我々メンバー間の意見交換によりだされたアイデアであります。

まずは別府温泉。ここは大きく3つに分けられます。明治初期に港が出来て漁師町の面影を残しながら急速に発展を遂げた商業地としての「竹瓦エリア」。路地がいたるところに残り共同湯と生活の利便性に

優れた住宅地としての「南部エリア」。そして、明治後期に駅が出来てから高級な別荘地として発展を遂げた文化的ゾーンとしての「山の手エリア」です。

「竹瓦エリア」には、別府温泉のシンボル「竹瓦温泉」をはじめ、「駅前高等温泉」や「不老泉」などの比較的大型の温泉施設が残ります。テーマ1でも述べた通り、ここは近代化温泉建築遺産を数多く抱える地域とも言えます。また、多くの美味しい食を提供するお店もあり、夜の賑わいもあります。ここは、住民と訪問者の「交流」ゾーンとして活かされるべきです。歴史的な温泉を楽しむ、商店街で買い物を楽しむ、美味しいものを食べる、夜にはのみ屋さんも沢山ある。別府八湯の住民や訪問者が気軽に訪れて交流を楽しむのには最適の場でしょう。我々、「竹瓦倶楽部」はこの姿を目指しています。

「南部エリア」は少し趣きが異なります。情緒溢れる路地には古い町並みが残り、病院等も多く残ります。住民が主体の共同湯が数多く点在、様々な職人技も残っています。なによりも土地が平たんで移動も車無しで出来ます。このようなエリアはむしろ高齢者への対応を重視し、バリアフリー化の促進、在宅介護等のネットワークを構築することにより「移住」「定住」ゾーンとしての位置付けが正しいのではないかと思います。もちろん、「竹瓦」エリアでの「交流」も気軽に楽しむ事が出来、高齢者にとっては大変に住みやすい町になる事でしょう。

「山の手エリア」は、規模の大きな別荘建築が未だに残っている場所です。既に圧用されている「聴潮閣」をはじめ、「中山別荘」「麻生別荘」「田の湯館」も残っています。「茶房信濃屋」も古い別荘を活用したものです。また、一流建築家の手による「中央公民館」等の名建築もあります。そして、別府市民が最も愛している場所として挙げられる「別府公園」、アルゲリッチ音楽祭などの様々なイベントが行われる「ビーコンプラザ」もあるように、このエリアは豊かな自然空間と文化的な雰囲気も十分に備えています。また、今年完成する総合体育館をはじめテニス倶楽部や運動公園などもありスポーツの環境も整備されています。その様な事から、このエリアは「芸術文化スポーツゾーン」として、活かされるべきであり、住民や訪問者の生活を豊かにする機能を果たします。

また、今後は海岸線の整備も進み、あらたな「別府海岸エリア」も生まれるかもしれません。「北浜温泉テルマス」や「北浜旅館街」、これからできるであろうマリンスポーツ拠点を上手に活かし、「海洋型スポーツゾーン」として発展する可能性を秘めています。

この「別府温泉エリア」には、もう一つの切り口がございます。それは「文学」です。明治から昭和の初期にかけて別府には数多くの文化人が訪れています。芥川賞作家の徳田秋声、織田作之助、火野葦平をはじめ、与謝野晶子、竹久夢二などなど。同時にこれら訪問者としての文化人を迎え入れた別府の文化人も沢山存在しています。大分歌人を立ち上げた浅利良道、丸山待子等がそれに該当します。これらをきちんと取り上げて情報発信する事も「文化の町づくり」には大切ですし、既に楠銀天街の喫茶「しんがい」に設けられた「流川文庫」でその第一歩は踏み出されています。

これら「別府温泉エリア」にも問題点がございます。商店街の活性化です。原因を考えてみますと、居住人口の減少、商店経営者の高齢化、駐車場の不足問題だと思えます。居住人口の減少に関しましては、南部エリアでの高齢者向け住居の供給等ができれば良いかとは思いますが、正もうしあげて、過去の人口に応じて構成された商店街は一度再構築を真剣に考える時期では無いのかなと思えます。商店経営者の高齢化もこの検討の中で解決すべき問題だと思えます。

駐車場の不足ですが、これが無いと商店街の再構築も難しくなりますので、早急に取組むべき課題かと存じます。例えば市有地であれば現在は何にも利用されていない、楠港の跡地、あまり車の停まっていな別府公園の駐車場は如何でしょうか？欧米でごく普通に導入されている「パークアンドライド(駐車して移動)」の導入です。楠港跡地もしくは別府公園の駐車場に車を駐車し、それぞれと中心商店街を巡回するバスで繋ぐ訳です。無料巡回バスが望ましいです、途中で乗降が自由にできる小型低床式であれば細い道も走れるし、高齢者にも便利なものになります。

これら別府温泉地域の全体像を眺めてみますと、健康的で文化的な楽しい交流型の暮らしができる高齢者が移住してみたいくなる様な「優しい町」になるという事です。

次は浜脇温泉を考えてみます。浜脇はむしろ別府温泉よりも古い歴史を持ち、明治期の建築物も数多く残っています。また「古くからの生活文化」を守りながら暮らしている住民も多く存在します。町歩きをして一番面白いのはこの「浜脇エリア」です、別府温泉が「昭和」だとすると、この町には「明治・大正」の面影がいまだに色濃く残っています。しかしながら、あまり観光地化して欲しくない場所でもあります。

狭間から繋がるバイパスが完成します。大分市のベッドタウンとして捉えてみると如何でしょうか？ 浜脇は水の都です、「河内溪谷」や「丸清水」「角清水」といった井戸、そして、古くから栄えた「温泉」。「朝見川」のほとりのゆったりした時の流れを感じさせる素晴らしい町です。老朽化した木造建造物は極力活かす、建て替えの時には周辺環境に合ったものを建てる、豊かな水を都市計画に取り入れる事により、うるおいのある住空間が生まれると思えます。

別府になりますが、同じ空間として捉えると南小学校には古い木造の校舎が残っています。ここは是非とも木造校舎を残し、未来の宝である子供達とお年寄りの方々が交流できるような児童教育に向けた施設にして欲しい。足を延ばせば朝見神社をはじめ、児童館やカトリック教会もあります。地域にはお世話好きなお年寄りの住民も沢山います。豊かな感覚を持った子供達を育てるのにこの浜脇程素敵な場所はありません。

大分市で働く若者世帯に積極的にアピールしては如何でしょうか？子供達がすくすくと成長できる住環境と教育環境を整備すればきっと浜脇の良さが理解できるだろうし、観光とは一線を画した形で町も活気づき、「古き良き生活の文化」も守り、伝えられるのではないかと思います。

更に浜脇の奥には「内成」という地区があります。ここは日本の棚田百選にも選ばれる様な立派な棚田の風景が残っています。ここでも地区の住民が棚田を守る為に活動を開始しようとしています。大都市に暮らす人々と連係して、棚田の文化を守る。大都市に暮らす子供達にも、豊かでふとこの深い浜脇の恩恵を与える事ができるのなら、更に素晴らしい事だと思います。

観海寺温泉は古くは平安時代に式子内親王が人生の最後を過ごしたという伝説の地です、別府の発展に伴い、高級な旅館が立ち並び別府の迎賓館的な役割を果たして来ました。名前の通り、この観海寺の最大の魅力は別府湾を望む素晴らしい景観です。この緑豊かな温泉郷には多くの方が魅せられる事と思います。

21世紀はアジア大太平洋の時代です、中国をはじめ、東南アジアの国々が急速な経済発展を遂げて大観光旅行時代が訪れます。また、それに伴い、さまざまな国際会議、コンベンションが行われる事になります。

ビーコンプラザを眼下に望み、高速道路からのアクセスも良好で、素晴らしい景観に恵まれ、別府八湯最大の収容力を誇る「杉の井ホテル」は、これからもアジア大太平洋の時代の別府の迎賓館としての役割を果たしていただけるものと思います。

「脱観光」でありながら、この観海寺温泉は「観光志向」であります。これは、押し寄せるアジア太平洋地域からの観光客を受け入れるエリアも実際は必要であり、他地域への緩衝地的な役割も期待している訳です。

掘田温泉は山あいの温泉地で豊かな温泉資源を有し、今でも別府市内に貴重な温泉を供給しています。この掘田温泉から鶴見岳に至るエリアに関しては、開発の手をいれずにできるだけ自然環境を残す事を提案します。

掘田から蔵人地区、そして鶴見岳に至るエリアの豊かな自然環境の保存こそは、将来に渡り、観海寺温泉、別府温泉、浜脇温泉の温泉資源の枯渇を防止する手段です。

参考までに申しますと、奥別府の伽藍岳のふもとの塚原温泉から湯山、十文字原、そして扇山のエリアも同様の措置が取られるべきと期待します。これらのエリアの自然環境の保全は、すなわち、明礬から鉄輪、柴石、そして亀川にいたる温泉地の温泉資源の枯渇の防止になります。

明礬温泉ですが、温泉を活用した特産物の「湯の花」を製造する「湯の花小屋」(別府市の指定文化財)に代表される個性的な景観と、温泉成分を多量に含んだ独特の泉質の温泉は既に温泉地としての人気を十分に得ております。

日本最大にして、効能的にも優れたものを有する「健康保養ランドの泥湯」、硫黄泉や酸性泉の共同湯には皮膚病に悩まされている人々も多く訪れています。そういう意味では、この明礬温泉は既に「医療的湯治の可能な温泉地」としての個性をしっかりと築き上げていると言えます。

鉄輪温泉ですが、ここは別府温泉と同様にエリア分けが必要だと思います。「地獄エリア」および「湯治エリア」です。

言うまでもなく鉄輪の「地獄」は別府観光のハイライトです、もっとも簡単に地球からの贈り物である温泉の恵みを体感できるものとしてこれからも大いに賑わって欲しいものです。そして、地獄周辺のホテル街

には比較的大規模なホテルが集積していますので、この「地獄エリア」は観海寺エリアと同様にアジア太平洋から押し寄せる大観光時代の受け皿として間違い無く発展するものと思われます。

そして「湯治エリア」です。明治のシルクロード探検を行った「大谷光瑞師」を記念した「大谷公園」から、共同湯の並ぶ「いでゆ坂」を中心に「ひょうたん温泉」に至るエリアの南北には、いたる所からゆけむりが立ち上り、細い路地が複雑に交差し、非常に面白い町並みが残っています。そして、「温泉暖房」や「地獄蒸し」等の「温泉資源活用の文化」も残り、伝統的な湯治場として今も残っています。

このエリアのシンボルとなるのは、一遍上人が開かれたとされる「温泉山永福寺」および「鉄輪蒸し湯」だと思います。「鉄輪蒸し湯」はできれば歴史的温泉建造物として昔の姿に復元されるべきであると思います。また、路地に残る多くの木造の湯治宿や旅館は、鉄輪独特の街並みを形成しています。

住民の中では、「湯治」の効果は既に実体験としてあると思います。しかしながら、問題は多くの人々にとっては未知の領域であるという事です。例えば「地獄蒸し」は大変にダイエット効果があったりする訳でして、今まではあまり情報が出ていなかった感じがします。その証拠にハットウオンパクにおいて、地獄蒸しを気軽に楽しむ事ができる「地獄蒸し屋台」も登場しましたが、あつと言う間にその素晴らしさが評判になりました。

この地域でも以前から様々な方々により、地道な地域の活性化の為の活動が行われています。温かな接客と常連さんを大切にす精神により、今でも別府八湯で最高の「保養滞在型エリア」だと思います。今後は、如何にこのエリアでの滞在が「健康増進」に効果があるのか？という事を情報発信するのかという事。同時により現代的な「健康増進」のプログラムの提供ができれば、この「温泉資源活用の文化」にも磨きがかかると思います。

古くからの温泉の歴史を実感でき、温泉地としての情緒に溢れ、隣接して大観光地の「地獄エリア」をひかえている、この「湯治エリア」の潜在的な力はおそらく別府八湯で一番なのではないかなと思います。

* * *

こちらで延々と書き連ねて来た「輝ける別府八湯を夢見て」を終わりたいと思います。柴石温泉と亀川温泉が抜けているという御指摘は甘んじて受けます。勉強不足でございます。

この文章は 様々な地域の事に関して具体的に言及しています。地域の方々におかれましては、「余計なお世話」だと思われるかも知れませんが新年早々、ある変わり者の夢想だと御理解ください。更に、こういうやり方も有るはずだというご意見も多々あろうかと思ひます。その時はどうぞ御教授ください、地獄の鬼に大笑いされますが、来年書きたいと思ひます。

それでは、みなさん今年1年がんばって参りましょう。少しづつでもこの文章で書かれた世界が実現することを期待しつつ、終わりと致します。くどい話におつきあい頂き、誠にありがとうございました。実際の私は口数の少ない男です。

平成14年元旦 別府八湯竹瓦倶楽部代表世話人 野上泰生

[戻る](#)